連載
第4回 はじめての
介護研究
テーマ 文献 計画
データ収集・分析 発表

鈴木俊文
静岡県立大学短期大学部
社会福祉学科 准教授

介護老人保健施設，認知症高齢者グループホームにて実務経験を重ねた後，日本福祉大学高浜専門学校専任教員などを経て現職。認知症ケア，ケアマネジメント，スーパービジョン，災害福祉,地域福祉活動などの現場研究を力点に，教育・研究・研修活動を展開。主な著書に『社会福祉・介護福祉の質的研究法』（共著，中央法規出版），『災害時の介護』（共著，みらい）など。

つくってみよう！ 実践現場のための研究計画書

本連載のねらいと位置づけ

本連載は全６回を通して，介護研究の考え方，研究のプロセスや方法を解説し，読者の皆さん自身が実践現場の課題に対応した研究テーマを設定し，介護研究を始めるきっかけを得ることを目的にしています。

前回（本誌Vol.14，No.２）は，文献検索・文献検討の方法について解説しました。設定した研究テーマは，研究内容を表す具体的な「キーワード」により，文献検索・文献検討を進めることが可能になります。ただし，このキーワードの選定次第では関連する重要な文献がヒットしなくなってしまうこともあります。キーワードの選定にあたっては，研究テーマや内容を十分に踏まえたものであるかを検討すると共に，そのキーワードが一般的に活用されている用語であるかなども確認することが大切です。

コラムでは，これらの内容を踏まえ，文献検索・文献検討を通して新たなキーワードが再発見される経験が語られていました。そして，そのことが研究を深め，前進させていったという点が大変印象的です。今後も，このキーワードが研究プロセスにおいて重要になることを意識していただきながら，次のステップに入っていきたいと思います。

さて，第４回となる今回は，研究計画書の基本的な考え方や書くべき内容について概説します。これまでに行ってきた研究テーマを検討したり，先行研究の検討結果を整理したりして，研究計画書としてまとめてみましょう。

研究計画書の目的

研究計画書は，文字どおり研究を進めるための計画書ですので，「研究テーマの設定や文献検索・文献検討の前に書いた方が良かったの??」と思われるかもしれません。ですが，研究計画書は，研究テーマの設定やある程度の文献検討を行い，構想が見えはじめた段階でなければ作成することが難しいものなのです。

表１に，一般的に研究計画書で書くべき内容を示しました。このように並べてみると，第１回から扱ってきた内容が前半部分に位置づけられていることが分かります。また，まだ本連載では解説していない「研究方法」や「倫理的配慮」などについても項目化されています。今後，本格的に研究を進めていくためには，これらの項目で書くべき内容を理解し，研究テーマとの関連で研究計画をまとめていくことが必要です。

表1　研修計画書で書くべき内容

今回解説！

- 1．研究テーマ
- 2．研究目的
- 3．研究の背景
- 4．先行研究の検討
- 5．研究方法
  - ①研究対象　②研究内容
  - ③研究期間　④研究方法（手法）
- 6．倫理的配慮
- 7．期待される成果
- 8．本研究の限界
- 9．引用文献・参考文献

ひとまずの「初級項目」　ここまで目指したい「中級項目」

- ✔研究テーマは，主題だけでなく副題を付けることで具体化されます。
- ✔研究目的と背景を分けにくい時は，「研究目的と背景」とまとめることも一つの方法です。
- ✔先行研究の検討では，計画とはいえ，既に検討した結果をまとめることが大切です。
- ✔ヒトを対象にした研究において，倫理的配慮は大変重要です。
- ✔期待される成果は，本研究で得られると予測される結果と，その結果を得ることにより，研究テーマとの関連で，どのような課題の達成や貢献が期待できるのかを記します。
- ✔文献は，引用したものと参考にしたものを分けて整理しましょう。

また，研究計画書が完成した後は，何らかの「調査活動」に入っていきます。この調査活動において，ご協力いただく調査対象者や研究協力者の方々に対する調査説明や研究協力の依頼の際に，研究計画書を提示することもあるでしょう。この点において，研究計画書の内容は，研究にかかわっている自分たちだけでなく，他者が読んでも理解できる研究の説明文としての役割も担っていることを理解しておく必要があるでしょう。

今回は，皆さんが研究初学者であることを想定し，ひとまずの初級項目として，**表1**で項目化した1～6までの内容について解説していきたいと思います。

研究計画書の「考え方」を押さえよう

■研究計画書が作成できれば研究の半分は終わる！

先述したように，研究計画書は研究テーマから研究目的・背景，研究方法など，研究全体のデザインを方法論的な手続きを踏まえてまとめるものです。そのため，研究テーマや関連する文献の検討をある程度終えた段階でなければ，作成することは難しいと述べました。

あくまで研究「計画書」ですので，後から変更や修正が可能な構想レベルのもので構いません。しかし，研究テーマや関連する文献の検討が十分にできていない段階で研究計画書を作成してしまうと，研究を進めてから，「そもそも何をしたかったのか」「どう進めればよいのか」と方向性を見失う状態に陥ってしまいます。つまり，この点から言って，研究計画書の作成は，これまで検討してきた研究の目的をあらためて再確認し，方法の適切さを整理する段階であると位置づけることができます。

この作業を通して研究の進め方をより具体化することができれば，自分たちの中でモヤモヤしていたものが，研究テーマと研究プロセスの関係で結び付き，「これならできる！」と，とても大きな手ごたえを得られることでしょう。同時に，研究計画書の作成を通して文章で説明することができると，大きな「すっきり感」を味わえると思います。私の経験的には，研究計画書の作成においてこのような「すっきり感」が得られるかどうかが，研究プロセスとしての深まりの一つの評価ポイントと言えるかもしれません。

筆者が初めて本格的に研究計画書の作成を経験したのは，大学院の修士課程のころ

表2　分かりにくい研究テーマの例

①移乗の介護技術の研究
②認知症ケアの専門性について
③Aさんが食事しやすい介護を目指して
④施設における職員指導のプログラムの考察
—チェックシートの効果—

表3　表2の研究テーマを修正したもの

①体格差のある利用者への移乗技術に関する研究
—スライドボードを活用した移乗動作の効果と課題—
②認知症ケアにおける介護職員の
アセスメント内容の比較分析
—非言語情報を活用した「気づき」の違いに着目して—
③脳梗塞による嚥下障害に対応した食事介助の研究
—ソフト食の変更による食事量と満足度の変化を中心に—
④特別養護老人ホームにおける
新人職員教育プログラムの開発
—介護職を対象にした技術評価シートの作成と導入効果—

でした。当時，大学院入学前からこの研究計画書を半年間かけて何度も何度も作成し直したのですが，入学後もさらに半年間かけて，研究計画書の練り直しを指導されました。この時に指導教員から受けた言葉は，「研究計画書が完成できれば研究の半分は終わったと言える」というものでした。

これは，「研究計画書さえ作成すれば何とか研究が進む」という話ではなく，研究計画書の作成が研究の質を決めるほど重要な作業で，研究プロセスの段階であることを指摘したものです。研究計画書の作成は，自分が本当に取り組みたいこと，明らかにしたいことを見つめ直し，それに必要な研究の進め方をとらえ具体化する活動です。そして，研究に取り組む意味を自分の言葉で言語化する経験にもつながります。この点から言えば，研究計画書の作成も，これまでに解説してきた研究テーマや文献検討同様に，個人作業だけでなく，チームでさまざまな対話を繰り広げながら，言葉を紡ぎ出すように作成を重ねていくことが重要になるでしょう。

研究計画書を書いてみよう

■研究テーマは研究のねらいや対象，内容が分かるように

先述したとおり，研究計画書は「計画書」ですので，後から変更や修正が可能な構想レベルで構わないのですが，研究テーマそのものの変更は，研究目的や対象，内容の変更にまで大きく及びます。そのため，研究計画書の構想段階で研究テーマについて何度も議論を重ね，より具体的な研究テーマとして設定することが大変重要です。逆に言えば，研究テーマが具体化されている計画書は，研究計画書全体の内容もよく吟味されているととらえることができます。

では，具体的な研究テーマとはどのようなものでしょうか。**表2**に，いくつか介護研究のテーマを挙げました。いずれも介護にかかわる研究ではあるものの，表示されたテーマからは，具体的な対象や内容までを読み取ることが難しく感じます。また，研究テーマに強い思い入れを感じるものもありますが，これは客観的な研究の価値やねらいがかえって伝わりにくくなっている印象も受けます。

このように，研究テーマは，どのような情報を，どのような表現で表すかによって，読み手の理解に大きな差を生み出します。**表3**は，**表2**の研究テーマに対し，研究計画書の作成を通して研究テーマが見直されたものです。いずれも，研究計画書の作成の中でテーマが具体化され，主題だけでなく副題が加わっているところに共通性があります。

これはあくまで一例であり，必ずしも副題をつけなくては具体性を見いだせないと

いうわけではありません。また，研究内容が具体化された分，研究テーマにさまざまな要素が入りすぎてテーマが長くなり，どの用語がメインなのかが若干分かりにくくなっているようにも感じられます。この点ですっきり感を出すためには，扱う用語の具体性や抽象度について再考の余地がありそうです。

とはいえ，**表2**と比較し，いずれも研究の対象や内容がよく見えるようになっています。このように，研究テーマは，短くすっきりした言葉でありながらも，研究全体を表したものでなくてはなりません。そして，魅力的な研究テーマを設定することができれば，読者に対してもその研究に対する興味や関心をより引き寄せ，研究の価値を高める大きな影響力を生み出すことでしょう。

■研究目的は，何について，何（誰）のために，何をやるのかをはっきりと！

研究目的は，研究テーマの具体的な中身を説明することが大切です。ここで大切になるのは，「何について，どのように研究するのか」と，「何（誰）のためになぜやるのか」という2つの視点をまとめることです。研究テーマが具体化されることで，対象や内容が明確になることは大変良いことですが，「なぜその研究をする必要があるのか」「その研究をすることでどのようなことに役立てられるのか（役立てたいのか）」といった研究の「目的」の明確さが何よりも重要です。また，研究の目的を整理することにより，独りよがりな自分勝手な研究や興味本位レベルでの研究ではないことを確認・証明することにもつながります。

■研究の背景は「あなたのリアルな経験と問題意識」を書こう！

これまでに，研究テーマは皆さんが身を置く介護現場の中で，さまざまな種として存在していることをお話ししました。研究の背景は，それらの課題を指摘するだけでなく，なぜ介護においてその課題に取り組むことが重要であるのかを研究目的と絡めて論述できると大変魅力的です。研究目的と背景は非常に強い結び付きを持っているため，「研究目的と背景」など，一つの項目として書いた方がまとめやすい場合もあるでしょう。この段階において，研究目的や研究の背景が十分に説明できない，書き進められない場合は，研究テーマの具体性が見いだされていない段階かもしれません。その場合は，本連載の第1回（本誌Vol.13, No.6），第2回（本誌Vol.14, No.1）の内容を参考に，あらためて研究テーマの設定に必要なさまざまな対話を重ねることをお勧めします。

■先行研究の検討は，ただ書き並べるのではなく「動向や問題点を整理」する！

前回（第3回）は，**表4**を活用し，文献検索・文献検討は研究プロセスを通して段階的かつ継続的に行われるものであることをお話ししました。研究計画書の作成の段階で求められる文献検討は，先行研究を整理することです。これにより「先人の取り組みから疑問点の答えを得られなかった」事実や，「類似する研究の動向」から「現在明らかになっていること・なっていないこと」を整理し，あらためて問題点の提示や，皆さんが取り組もうとする研究の実践上・学問上の意義を説得力を持って述べることが重要です。

表4　研究プロセスと文献検索・文献検討の目的例

時期	研究プロセス	文献検索・文献検討の目的例
序盤	研究テーマの検討・設定	• 研究の種を見つける • 研究テーマの具体化 • 用語の定義を確認する
序盤	研究計画の検討・研究計画書の作成	• 先人の取り組みから疑問点の答えを得る • 類似する研究の動向を知る • 明らかになっていること・なっていないことを整理する • ほかの研究と自分たちの研究との違いやつながりを知る • 取り組もうとする研究の実践上・学問上の意義を考える
中盤	データ収集・データ分析	• どのような調査方法が行われているかを知る • どのような調査が有効かを考える
終盤	分析結果に基づく考察	• 先人の研究結果を確認・比較する • 先人の知見を踏まえて批判・同意・提案をする • 研究の限界と今後の課題を考える

表5　日本介護福祉士会【実践現場のための専門誌「介護福祉士」執筆要領】（一部抜粋）

- 引用する際は，本文中の引用文を「 」でくくり，引用文中に「 」が使用されている場合は，その箇所を『 』に変える。また，引用文が終わってカギカッコをとじた後に，（著者名の姓のみ 出版年：引用ページ）のかたちで引用した文献等を記載する。長い引用の場合は，左側を全角で２字分字下げして，引用であることを明示すること。
- 文献の表示は，本文中の該当箇所に（ ）内で著者名・出版年・引用ページの順で記載する。著者名と発行年の間は半角のスペースを入れ，出版年と引用ページはコロンでつなぐ。
- また，注のあとに１行あけて，和文の文献も欧文の文献も含めてすべての文献を著者または編者の姓のアルファベット順にリストアップする。たとえば，単著の和文の本の場合，著者名，出版年，『書名（タイトル――サブタイトル）』出版社名で記載する。

また，引用・参考文献の表記方法は，各種学会などによって指定があります。**表5**は，日本介護福祉士会【実践現場のための専門誌「介護福祉士」執筆要領】の内容を一部抜粋したものです。このように，引用と自分の意見を明確に区別すると共に，研究計画書においても，最後の「引用・参考文献」において扱った文献を一覧にして表記しましょう。

■研究方法は「対象・内容・方法」を明確にする！

研究には，アンケートなど質問紙を活用したものや，インタビューによるものなどさまざまな調査方法が存在します。また，そこで得た調査データを数量的に把握して統計学的な分析を行う量的分析（研究）や，言語データから概念やカテゴリーを生成し，事象や事柄の関係性を構造的にとらえようとする質的分析（研究）などがあります。これらの概要は次回説明する予定ですので，今回は方法の説明を省くことをご了承ください。

研究方法では，こうした調査方法の説明だけでなく，誰を「対象」に，「何」をとらえることを目指し，どのような「方法」を採用するのか，それらを具体的に検討した上で設定することが必要です。つまり，「何のために，誰に，何を聞くのか」について構想として練っておくことで，データの対象や有効な収集方法についてあらかじめ検討しておくのです。

■研究に求められる倫理的配慮

介護研究はヒトを対象に行われる場合が多く，倫理はつきものです。各種の学会や介護福祉士会などにおいても，研究発表において遵守すべき研究倫理の指針が具体的に設定され公開されています。こうした倫理的配慮で求められる視点の例を**表6**にまとめました。これはあくまで一例に過ぎませんので，研究を開始する前に皆さんが今後研究発表を予定している学会や協会などの指針を必ず確認し（**表7**），それらに配慮した研究活動を進めるようにしましょう。

こうした倫理的配慮については，本来であれば大学などの研究機関に設置されている研究倫理審査委員会などで審査を受ける

表６　倫理的配慮で求められる視点

- ✔ 研究によって，対象者（研究協力者・当事者）に不利益を与えるものではないこと。
- ✔ 研究で参考・引用した先行研究は著者名，文献名，出版社，出版年，引用箇所などを明示すること。
- ✔ 長文の引用や図表の転載などを行う場合は，出版社や原著者からの承諾を得ること。
- ✔ 引用を行う場合は，引用した文章と，自分の意見をはっきりと区別し，正確に引用すること。
- ✔ 研究対象者の匿名性を確保すること。
- ✔ 匿名性確保のために事例を加工した場合は，その旨を明示すること。
- ✔ 調査は対象者（研究協力者・当事者）の自由意思で行われること。
- ✔ 調査で知り得た情報（データ）の使用や，研究発表にあたっては，事前に対象者（研究協力者・当事者）に説明し，文書で承諾を得ること。
- ✔ 調査で用いた調査用紙（質問紙）や結果データは，鍵のかかるロッカーなどで管理するなど，保管先や保管期間を明示し，対象者（研究協力者・当事者）の許諾を得ること。また，開示要求に対応できるよう，最低○年は保存すること。
- ✔ 調査データを捏造したり，データの一部分を改竄したり，恣意的に特定のデータを削除したりしないこと。

表７　倫理指針が公開されている学会・協会例

- **日本介護福祉学会研究倫理指針**
- **日本社会福祉学会研究倫理指針**
- **日本認知症ケア学会「研究発表等に関する倫理綱領」**
- **日本ケアマネジメント学会研究倫理指針**
- **日本認知心理学会「認知心理学研究」投稿倫理規定**
- **日本介護福祉士会「臨床研究における研究倫理チェックリスト」**
- **日本社会福祉士会「会員が実践研究等において事例を取り扱う際の留意点」**

ことがベストなのですが，なかなかそのような機会を得ることも難しいでしょう。そこで，各種の学会などでは研究倫理に関するチェックシート（リスト）を設け，それを活用して研究発表の申し込みを受け付ける例も増えてきました。

おわりに

いかがでしたでしょうか？　研究計画書の作成は慣れない作業で，文章力も問われます。しかし，今後研究成果を発表する段階では，それらを資料や論文に整えて発表することが必要です。この点から，今回の作業は成果物をまとめるための準備としても大変意味を持った活動です。ぜひ，研究計画書を完成できるようチャレンジしてみてください。

次回は，調査・分析方法についてお話しします。

参考文献

1）妹尾堅一郎：研究計画書の考え方―大学院を目指す人のために，ダイヤモンド社，1999.
2）前田樹海：はじめての看護研究，ナツメ社，2015.
3）田中千枝子編集代表，日本福祉大学大学院質的研究会編：社会福祉・介護福祉の質的研究法―実践者のための現場研究，中央法規出版，2013.
4）矢原隆行：はじめての介護研究マニュアル―アイデアから研究発表まで，保育社，2002.
5）日本介護福祉士会ホームページ http://www.jaccw.or.jp/home/index.php（2017年５月閲覧）
6）日本社会福祉士会ホームページ http://www.jacsw.or.jp/（2017年５月閲覧）
7）日本介護福祉学会ホームページ http://jarcw.jp/（2017年５月閲覧）
8）日本社会福祉学会ホームページ http://www.jssw.jp/（2017年５月閲覧）
9）日本認知症ケア学会ホームページ http://www.chihoucare.org/（2017年５月閲覧）
10）日本ケアマネジメント学会ホームページ http://www.jscm.jp/（2017年５月閲覧）
11）日本認知心理学会ホームページ http://cogpsy.jp/（2017年５月閲覧）